



技術史教育

第128号

2021.9.30

Education for History of Technology

第128号 目次	会長就任の挨拶…………… 吉田喜一(1)
	日本技術史教育学会2021年度全国大会開催案内…………… 鳥谷智文(2)
	ニュースレター電子版化移行措置に関して(第2報)・関西支部研究発表募集……………(3)
	30周年記念事業に係るお知らせ・会告・編集後記……………(4)

【会長挨拶】

会長就任の挨拶



日本技術史教育学会会長

吉田 喜一(都立産業技術高専名誉教授)

この度凶らずも新会長を拝命した吉田喜一です。よろしくお願いたします。現在、本学会会員は100人を少し切っています。今年の大会は11月6日(土)松江高

学発生以降のことで、人類出現以来の技術史全体を捉えられないとの認識に至りました。猿の前足を手にして、直立2足歩行を開始し人類が生まれました。その

ニュースレターは、会員になりますと全ページご覧になれます。会員はログインしてご覧ください。

大部で凹凸削れるように動き、中凹形状になることを証明しました。第2の原因は『熱変形』でした。研削温度は数百℃で、いわばスルメカのように、工作物が反った状態で削るので中凹になります。第1はレイノルズの流体潤滑方程式、第2はジャガーの移動熱源の方程式を解くこととなります。実験値と理論解を比べ、加工精度を阻害する原因を探し、それを除去、抑制する研究は大変やりがいがあり、高専学生が加工精度向上=技術進歩に貢献できていると感じ胸躍る日々でした。研削加工という生産実践に客観的法則性(流体潤滑理論、移動熱源の熱変形解析)を適用し、より高い技術を目指す研究は、武谷技術論を実践していると思っていました。

高専の助手として戻って更に工作機械の研究・教育をするようになって、この規定では客観的法則性=科

と重から負への転化が技術発展の原動力です。3年生と専攻科生に『科学技術史』の授業を受け持ちました。加工精度の歴史、動力の変遷、スピードの増加等、高専学生が研究しているテーマに沿って、授業の中で発表してもらいました。自分が研究しているテーマの内的発達法則を探求し、自分の研究が技術史のどこに位置しているか、今自分はどこにいるのか、未来はどうかと予測できるか、楽しく厳しい『過去から未来を訪ねる』発表をしてもらいました。

高専・大学の非常勤講師も定年でリタイアしました。実験をできる環境がなくなりました、技術史・技術論の研究は皆様とともに更に続けたいと思っています。